

論 文

市場価格と市場価値

東 井 正 美

キーワード：市場価値＝市場価格；「異常な組合わせ」；大量支配的規定と需給関係
経済学文献季報分類番号：02-32；02-33

1. 問題の所在

『資本論』第3巻第10章において「市場価格と市場価値」とが論述されている。この稿が完成稿でないこともあって十分整理されたものとは言われ難く、難解な章として知られている。

周知のように、市場価値に関する諸規定に関して、市場価値が総商品の価値総量の算術平均として決定されるという「加重平均規定」と、その部面で大量をなす商品の個別価値が市場価値を規制するという「大量支配的規定」とが説かれているが、いずれが「正当な」とみなされるべきかということが問題とされてきた。いま一つは市場価値と需給関係についてどのように理解すべきかという問題がある。これらの問題をめぐって多くの解釈が提示され、諸説紛々の感がある。本稿ではここではこれらの論争には立ち入らない。これまで、筆者は、問題の第10章「市場価格と市場価値」におけるこれらの問題をどのように理解すればよいのかについて考察してきた。前稿「市場価値論再考——『不明瞭な箇所』の再検討」〔6〕において市場価値と需給関係を取り上げた。

問題の第10章ではマルクスは市場価格に一致した市場価値の諸規定を論述するにあたって、市場価値＝市場価格の観点から、需給関係で決定される市場価格を市場価値と述べている。このことから、市場価値決定に需給関係がかかわるのではないかという誤解が生じてきた。しかし、市場価値自体の決定には需給関係は直接には関与しないのである¹⁾。需給関係が市場価値にかかわるのは市場価格を通じてである。本稿では、市場価値＝市場価格に関する諸規定を、市場価値決定の論理と、市場価値と一致した市場価格決定の論理にわけて整理した。そのうえで、市場価値＝市場価格と需給関係を取り上げることにした。ここでは、これらについての論争には立ち入らない。

2. 市場価値と市場価値規定

1) 市場価値の概念について

市場価値の概念は、いわゆる「剰余価値学説史」では以下のように規定されている。

同一の生産部面で同種の諸商品が、上位、中位、劣位という三つの生産諸条件のもで生産されているものとする。これらの生産諸条件のもとで生産されているすべての生産物は同一の市場においてもつべき「一般的価値は、各個の商品の個別的価値との比がどうであろうとも、すべての商品について同じである。この共通な価値こそ、これらの商品の市場価値であり、それらの商品が市場にでてくるときの価値である。この市場価値の貨幣での表現が市場価格であって……。現実の市場価格は、……市場価値に一致することは偶然に過ぎない。しかし、ある一定期間では諸変動は平均されて、現実の市場価格の平均が市場価値を表わす市場価格である、とすることができる。」（傍点は原文のイタリック体。〔I〕543ページ）。

市場価値とは、同じ部面で生産された同じ諸商品が同じ市場でもたなければならない「共通な価値」＝「一般的価値」のことである。売るために生産された諸商品がこの市場価値どおりに売られ社会的欲望をみたすことをもって市場価値は社会的価値となる。諸商品が市場価値どおりに売られるためには市場価値は市場価格と一致していなければならない。同じ市場に供給される同種の諸商品がもたなければならない同じ市場価格は、需給関係によって決定される。市場価値に一致する市場価格もまた、需給関係によって決定される。需給の変化によって市場価格は市場価値から背離しがちである。しかし、マルクスの取り扱う市場価値は、ことわりがないかぎりでは市場価格と一致しているものである。問題の諸商品は、市場価値＝市場価格どおりに売れるものと仮定されている。この仮定は重要であって、常に念頭において置かなければならない。次に、市場価値の諸規定をみよう。

2) 市場価値の諸規定

市場価値の規定については、『剰余価値学説史』では以下のように書かれてある。

「どの部類〔優位、中位、劣位の三つの部類——引用者〕が平均価値を確定するのに決定的であったかということは、主としてこれらの部類の数的関係または比率的数量関係によって定まるであろう。もし中位の部類が数のうえではるかに優勢であれば、これが平均的価値を決定するであろう。この部類が数のうえで劣勢であれば、そして平均的条件よりもわるい条件のもとで労働する部類が数のうえで有力かつ優勢であれば、これがその部面の生産物の一般的価値を決定する。といっても、その場合に、この部類内でさらに最も不利な立場に置かれている個々の資本家こそがこの決定をするのだと言おうというものでは、けっしてない。またそうしたことはとてもありそうにもない。」（傍点は原文のイタリック。〔1〕543ページ）。

ここで注目しておくべきことは、まず第1に市場価値がその部面で諸商品の大量をなす商品の個別的価値が市場価値を決定するということである。このような規定は「大量支配的な規定」といわれている。第2に中位の部類で生産される諸商品の個別的価値が確定する市場価値は「平均価値」とみなし、劣位の部類の諸商品の個別的価値が規定する市場価格は「一般的価値」と規定されていることである。この使い分けは、劣位の部類の大量商品が規定する市場価値は平均価値でないこと

を指摘しているものと考えられる。劣位の部類で生産される諸商品は大量をなすがゆえをもってこの市場価値は平均価値に近似的になることはいうまでもない。

かかる市場価値の諸規定の考え方は『資本論』第3巻第10章「市場価値と市場価格」〔2〕〕において基本的には踏襲され、市場価値の諸規定についてより詳しく述べられてある。次に、これを見よう。

マルクスは、大量商品の個別的価値による市場価値の諸規制について、「三つの場合」を例示して以下のように説いている。

「第1の場合」——同一部門において生産され、同一の市場に供給されている同種の諸商品の「商品大量が同一の標準的な社会的諸条件のもとで生産されていて、この価値は、同時に、この商品量を構成する個々の商品の個別的価値でもあると仮定しよう。いまもし、比較的小さい1部分はこの諸条件よりも悪い諸条件のもとで生産され、他の1部分はそれよりもよい条件のもとで生産されており、したがって、一方の部分の個別的価値は大部分の商品の中位的価値よりも大きく、他方の1部分の個別的価値はこの中位的価値よりも小さいが、しかしこの両極は平均されて、両極に属する商品の平均価値は中位の大量に属する商品の価値に等しいとすれば、市場価値は、中位的諸条件のもとで生産された商品の価値によって規定される。この商品量全体の価値は、中位的諸条件のもとで生産された諸商品も、それよりも下または上の条件のもとで生産された諸商品を含めての、すべての個々の諸商品の価値を合計した現実の総額に等しい。この場合には、この商品量の市場価値または社会的価値——商品量に必然的に含まれている労働時間——は、中位の大量の価値によって規定されている」。

「第2の場合」——第1の場合とは「反対に、問題の商品の市場に出される総量はやはり同じままであるが、しかし悪い諸条件のもとで生産される諸商品の価値がより良い諸条件のもとで生産される諸商品の価値と相殺されないために、より悪い諸条件のもとで生産される諸商品の大量が中位の商品量に比べても他方の極に比べても相対的にかなりの大きさを占めているものと仮定すれば、その場合には、より悪い諸条件のもとで生産された商品大量が市場価値または社会的価値を規定する。」

「第3の場合」——「最後に、中位よりも良い諸条件のもとで生産された商品大量が、中位よりも悪い諸条件のもとで生産された商品量よりもずっと多く、また、中位の事情のもとで生産された商品量に比べてもかなりの大きさを占めていると仮定すれば、この場合には最良の諸条件のもとで生産された部分が市場価値を規制する。市場が供給過剰の場合には、いつでも、最良の諸条件のもとで生産される部分が市場価格を規制するのであるが、このような場合はここでは度外視される。われわれがここで取り扱うのは、市場価値と異なる限りでの市場価格ではなく、市場価値そのもののさまざまな規定である。」

これらの三つの場合の叙述から読み取れることは、生産部門で大量を占める商品の個別的価値が市場価値を規制するということである。次に、「市場価値と異なる限りでの市場価格ではなく」とい

うことに注目しておかなければならない。この指摘は、この市場価値の諸規定で取り扱われている市場価値が市場価格に一致した市場価値であるということを意味しているのである。

さてこの第1の場合には、中位の生産諸条件で生産されてその部面で大量をなす商品の個別的価値が確定する市場価値は平均価値に等しいのである。例えば、一つの生産部門で1労働時間＝個別的価値をもつ商品が10個と、2労働時間＝個別的価値をもつ商品が80個と、3労働時間＝個別的価値をもつ商品が10個というように生産され、市場に供給されているとすれば、市場価値は、一面ではこれらの商品の平均価値、すなわち2労働時間＝平均価値であり、他面ではその部面の平均的諸条件のもとで生産され、これらの生産物の大量なしている諸商品の個別的価値、すなわち2労働時間＝価値とみられるべきである。平均価値に一致する市場価値は、「理想的な」市場価値とみなすべきである。この「理想的な」市場価値を市場価値の諸規定を論述するに当たっての出発点においている。この「理想的な」市場価値について以下のように定義されている。

「市場価値は、一面では一つの部面で生産された諸商品の平均価値とみなされるべきであり、他面ではその部面の平均的諸条件のもとで生産され、その部面の生産物の大量をなしている諸商品の個別的価値とも見なされるべきであろう。」と。

従来、この規定には前半の市場価値の規定と後半のそれとでは、食い違いがあるのではないかと、疑問視されてきた。

市場価値＝平均価値という「理想的な」市場価値に焦点を合わせて考えれば、前半の市場価値と後半の市場価値との間には矛盾がない。

「その生産部面での平均的諸条件のもとで生産され、その部面で大量をなす諸商品の個別的価値」によって規制される市場価値が平均価値と合致する場合でのような「理想的な」市場価値に焦点を合わす限りでは、前半の市場価値＝平均価値と後半の市場価値＝大量商品の個別的価値との間には食い違いがない。

今一つの大きな問題は、市場価値を規定するのは「平均価値」 [=平均規定] であって、大量商品の個別的価値が規定するのではないと、いう見解である。マルクスの市場価値に関しては、「理想的」には「平均価値」に等しものであるべきだと考えていたことには疑いの余地がない。しかし、現実的に市場価値を規制するのは大量商品の個別的価値であると考えていたのである。マルクスは「理想的な」市場価値から出発するが、市場価値は、「現実には、ただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れる」ことを指摘している。以下、便宜的に「理想的な」市場価値＝平均価値にたいして「現実には、ただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れる」市場価値を「近似的な」市場価値と呼ぶことにする。現実には市場価値を規制するのは大量商品の個別的価値であるがゆえに、市場価値は平均価値に一致することもあるが、近似的にならざるをえないのである。

「第1の場合」において現実には中位の生産諸条件で生産される大量商品の個別的価値が規制する市場価値は、平均価値に等しく「理想的な」市場価値となっている。しかし、「第2の場合」と「第3の場合」に説かれているそれぞれの市場価値は、平均価値に近似的に現れる「近似的な」市場価

値なのである。

「第2の場合」において劣位の諸条件のもとで生産される大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は、平均価値に近似的に現れる。例えば、1労働時間という価値をもつ商品10個と2労働時間という価値をもつ商品が20個と、3労働時間という価値をもつ商品が70個あるとすれば、大量商品の個別的価値によって規制される市場価値は3労働時間という価値である。平均価値は2.6労働時間である。市場価値は平均価値に近似的に現れている。この場合には、「理想的な」市場価値に関する先の定義は次のように変容する。

「市場価値は、現実には、一面では一つの部面で生産された諸商品の平均価値に近似的なもととして現れ、他面ではその生産部面の『現存の社会的・標準的生産諸条件』のもとで生産されて、その部面の生産物の大量をなしている諸商品の個別的価値とみられるべきであろう。」と。

ところで、マルクスは、3つの場合の市場価値の諸規定にすぐ続けて以下のように説く。

「非常に厳密に言えば（といっても、もちろん現実にはただ近似的に、非常にさまざまに変容して現れるだけであるが）、第1の場合には中位の価値によって規制される全商品量の市場価値はそれぞれの個別的価値の総額に等しい。といっても、両極で生産される商品にとってはこの価値はそれらの商品に押し付けられた平均価値として現れるのではあるが」。

「第2の場合には両極で生産される個別的価値量が相殺されないで、より悪い諸条件のもとで生産されたものが決定する。厳密に言えば各個の商品の、または総商品量の各可除部分の、平均価格または市場価値は、いまでは、いろいろな条件のもとで生産される諸商品の価値の加算によって得られる商品総量の総価値と、この総価値から個々の商品に割り当たる可除部分とによって、規定されているであろう。このようにして得られる市場価値は、有利な極に属する商品ばかりではなく中位の極に属する商品さえもの個別的価値より高いであろう。だが、それは、なおつねに、不利な極で生産される商品の個別的価値よりもやはり低いであろう。市場価値がどの程度までこれに近づくか、またはこれと一致するかは、全く、不利な極で生産される商品量とその商品部面でどれだけの範囲を占めるかによって定まる。需要の方がほんのわずかでも大きければ、不利な条件のもとで生産される商品の個別価値が市場価値を規定する。」

「最後に、第3の場合のように、有利な極で生産される商品量が、単に他方の極のものとは比べても中位の条件のものとは比べても、より大きい範囲を占めているならば、市場価値は中位の価値よりも低くなる。両極と中位との価値総額の加算によって計算された平均価値は、この場合には中位の価値よりも低い。そして、それは、有利な極が占める範囲の相対的な大きさによって、中位の価値に近くもなれば遠くもなる。需要が供給に比べて弱ければ、有利な条件で生産される部分が、その大きさはどれだけであろうとも、その価格をその個別的価値まで引き下げることによって、のさばってくる。市場価値は、供給が需要をはなだしく超過する場合を除けば、この最良の条件のもとで生産される商品のこの個別的価値とは一致しない。」

問題は「厳密に言えば」と断って述べられている市場価値＝平均価値をどう理解すべきかという

ことである。「第1の場合」には中位的諸条件のもとで生産された大量商品の個別的価値によって規制された市場価値が平均価値に等しいというのだから問題がない。両極で生産される諸商品はこの市場価値の規定には参画せず、両極の商品にとっては、この市場価値は「両極に押し付けられた平均価値として現れるのである」ということに注意を払えば、市場価値規定を「大量支配的规定」で説いていることが読み取れるのである。

問題は「第2の場合」と「第3の場合」とである。これらの場合には、「厳密に言えば」での平均価値＝市場価値が、大量商品の個別的価値に規制される市場価値と相違することである。

じつは、この相違を説明するのが需給関係なのである。マルクスの取り扱う市場価値は、断りのない限り、市場価格と一致したものである。したがって、市場価値に一致した市場価格について見れば、需給関係が問題とならざるをえないのである。

マルクスは、うえの叙述にすぐ引き続き「このような、ここで抽象的に述べたような、市場価値の決定は、現実の市場では買い手たちのあいだの競争によって媒介される。といっても、それは、こうして決定された価値で商品量を吸収するだけの需要があるということを前提としてのことである」と述べている。こう述べてから、マルクスは「厳密に言えば」での市場価値＝平均価値と需要供給関係とのかかわりあいを論述している。この点について節を改めて考えることにしよう。

3. 市場価値と需給関係

1) 市場価値＝平均価値と需給関係

市場価値それ自体は、現実には大量商品の個別的価値によって規制される。マルクスは、このことを明らかにしたうえで、「第2の場合」と「第3の場合」とで、なぜ「現実の」市場価値が平均価値から背離するかを論述しているのである。

まず「理想的な」市場価値＝平均価値についての、需要供給の関係についてマルクスの説くところを見てみよう。以下、市場価格が平均価値に一致する需給関係を考察しよう。

マルクスはいう、「ここで抽象的に述べたような、市場価値の決定は、現実の市場では買い手たちのあいだの競争によって媒介される。といっても、それは、こうして決定された価値で商品量を吸収するだけの需要があるということを前提してのことである。……／第2に、商品が使用価値をもつということは、ただ、その商品がなんらかの社会的欲望をみたすということを意味しているだけである。……ところが、一方の側に一つの生産部門全体の生産物が立ち、他方の側に社会的欲望が立つことになると、このみたされるべき欲望の量が本質的な契機になる。いまでは、この社会的欲望の程度すなわちその量を考察することが必要になる。／これまで与えられた市場価値に関する諸規定では、生産される商品の量は同じであり、与えられた量であるということ、相異なる諸条件のもとで生産されるこの商品量の成分間の割合だけが変化するということが想定されている。また、この商品量が普通の供給量だと仮定しよう。その場合、生産された商品の一部分がときには市場から引き上げられ

ることもあるという可能性は無視することにしよう。いまこの商品量にたいする需要もまた**普通の需要**であるであれば、この商品はその市場価値で売られる。」（ゴシック体は引用者）

念のために指摘しておくべきことは、次のことである。ここで取り扱われている市場価値＝平均価値は、市場価格＝平均価格と合致したものである。市場価値自体の確定は需給関係とは関係がない。市場価値を決定するのは、大量商品の個別的価値であって、需給とかかわりなく決定される。この市場価値どおりに商品が売れるという前提のもとでは、市場価値は市場価格と一致していなければならない。そこで市場価値に一致した市場価格が問題となり、この市場価格が需給とかかわってくるのである。この点が今まで曖昧してきたがゆえに市場価値と需給関係の理解が完全ではなかったであろう。

ここで問題の「普通の供給量」と「普通の需要」についてマルクスの説くところを聞こう。

他の箇所では、マルクスは言う、「平均価値での、すなわち両極の間にある大量の商品の中位価値での、商品の供給が**普通の需要**をみたす場合には、市場価値よりも低い個別的価値をもつ商品は特別剰余価値または超過利潤を実現するが、市場価値よりも高い個別的価値をもつ商品はそれ自身が含んでいる剰余価値の1部分を実現することができないのである。」（ゴシック体は引用者）。この所説から読み取れることは、平均価値で供給される商品総量を吸収する需要が「普通の需要」である。

さらに、別の箇所ではマルクスはこう述べている。「ところが、一方の、ある社会的物品に費やされる社会的労働の総量、すなわち社会がその総労働力のうちからこの物品の生産に振り向ける可除部分、つまりこの物品の生産が総生産のなかで占める範囲と、他方の、社会がこの一定の物品によってみたされる欲望の充足を必要とする範囲との間には、少しも必然的な関連はないのであって、ただ偶然的な関連があるだけである。」「しかし、一定の物品の生産に振り向けられる社会的労働の範囲が、みたされるべき社会的欲望の範囲に適合しており、したがって生産される商品量が不変な需要のもとでの普通の基準に適合しているならば、この商品は市場価値で売れる。諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である。この法則から出発して背離を説明するべきであって、逆に背離から法則そのものを説明してはならない。」

こうも述べられてある、「ある商品がその市場価値どおりに売られるためには、すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類の総量に振り向けられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的欲望、すなわち支払能力のある社会的欲望の量に対応していなければならない。競争、需要供給関係の変化の対応する市場価格の変動は、それぞれの商品種類に振り向けられる労働の総量を絶えずこの限度に引きもどそうとするのである。」と。

以上の叙述から明らかになったことは、市場価値＝平均価値どおりに諸商品が販売され購買された場合の諸商品の供給総量が「普通の供給量」であり、これに適合している需要が「普通の需要」のことである。次に、「不明瞭な箇所」をみよう。

2) 「不明瞭な箇所」について

かつて、山本二三丸氏は、「引用の順序がたんに便宜上、第3巻第10章において叙述されている順序」によつて、「不明瞭な箇所」を以下のように列挙されている。使用されている訳本は、長谷部文雄訳本、青木文庫（9）である（〔3〕122～124ページ）。そのまま使用することにしたが、（4）の箇所は少し訳くしかえた。引用ページはつけない。なお、文中のゴシック体は山本二三丸氏（〔4〕122～4ページ）。

（1）「ただ異常な組合わせのもとでのみ、最悪の条件下または最良の条件下で生産される商品が**市場価値**を規制するのであって、市場価値はまた市場価格の動揺の中心をなす——といっても同一種類の商品については同じである。」

（2）「これに反し、需要が強くて、最悪の条件下で生産される商品の価値によって価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、この商品が**市場価値**を規定する。そうしたことが生じうるのは、需要が普通の需要をこえる場合、または、供給が普通の供給以下に減少する場合だけである。最後に、生産される商品の分量が、中位の市場価値で売れる以上に大きい場合には、最良の条件下で生産される商品が**市場価値**を規制する。」

（3）「需要が供給にくらべて弱ければ、有利に生産される部分が、その大きさはどれだけであろうとも、その価格をその個別的価値にまで引き下げることによってのさばってくる。**市場価値**は、供給が需要をはなはだしく超過する場合を除けば、最良の条件のもとで生産される商品の個別的価値とは一致しない。」

山本二三丸氏は、（1）の箇所は別として、他の箇所のゴシック体の市場価値は、市場価格の誤記ではないかと指摘された。たしかに、これらの箇所ですべて述べられているのは市場価格についてのことである。しかし、その市場価格は、市場価値と一致した市場価格のことなのである。したがって、そのことを理解しておれば、市場価値を市場価格に訂正しなくてもよい。

さて、（1）箇所での「異常な組合わせ」についてみよう。山本二三丸氏は、生産諸条件の「異常な組合わせ」として理解された。「平均的条件」のもとで生産される商品が大量を占める第1の「組合わせ」にたいして、これと異なる「組合わせ」、いいかえれば「劣悪な条件」のもとで生産される商品大量が相対的により大きい第2の組合わせと、「優良な条件」のもとで生産される商品大量が相対的により大きい第3の「組合わせ」が「異常な組合わせ」のことだと指摘された（〔4〕136～7ページ）。「第2の場合」と「第3の場合」のような生産諸条件の「組合わせ」を「異常な組合わせ」だとみなすことが今日では通説になっている。

私も「第2の場合」と「第3の場合」のような生産諸条件の組合わせにおいてのみ最悪の条件下または最良の条件下で生産される商品大量の個別的価値が市場価値を規制すると考えている。

しかしながら、この「異常な組合わせ」とは、需給の「異常な組合わせ」のこではないかと問題提起してきた。つまり、市場価格が平均価値から背離して、最悪の条件下または最良の条件下で生産される大量商品の個別的価値によって規制される市場価値に一致する場合の需給関係をさして

「異常な組合わせ」と言ったものと思われる。

劣位の生産諸条件で生産される商品が相対的に大量となす「第2の場合」において市場価値＝市場価格決定の需給関係をみてみよう。まず指摘しておくべきことは、同じ部面で生産される同種の諸商品が同じ市場で販売され、購買されている市場価値＝市場価格の決定については、市場価値の決定と市場価格の決定とに分けて考えなければならないということである。マルクスは、劣位の生産諸条件のもとで生産され大量をなす商品の個別的価値が市場価値を決定するという。「厳密にいえば」で市場価値は平均価値＝平均価格だと述べる。この平均価値＝平均価格が実現するためには、市場価格を成立させる需給関係が問われなければならない。市場に供給されるこの商品量が市場価格＝平均価格どおりに売れるためには、この商品量が「普通の供給量」だと仮定すると、この商品量に対する需要もまた「普通の需要」でなければならない。しかし、現実にはそういうことは偶然にしか起こり得ない。

マルクスの説く、最悪の条件下で生産される商品の個別的価値が規制する市場価値に一致する市場価値＝市場価格の説明を整理することにする。このことを「第2の場合」においてみてみよう、同じ市場へ供給される同種の商品総量が市場価値＝平均価値どおりに売られたと仮定しよう。この場合に市場価値に一致している市場価格＝平均価格を決定している需給関係は、「普通の需要」＝「普通の供給量」という関係としてとらえられている。この需給関係が「普通の」の組合わせとみなしてよい。これに対して、商品総量のうち大量を占める商品の個別的価値によって規制された市場価値で商品総量が販売され購買されたと仮定しよう。この場合に、市場価値に一致した市場価格を決定した需給関係をみてみよう。再生産された商品量は同じだと考えるなれば、この商品総量にたいする需要〔＝現実の市場に表れた社会的欲望〕が「普通の需要」よりも大きくなっているのである。さもなければ、需要〔＝普通の需要〕が変わらないのに、再生産量が「普通の供給量」以下に減少したのである。

このことを、(2)の箇所で、「需要が普通の需要をこえる場合、または、供給が普通の供給以下に減少する場合だけである」といっているのである。このような需給関係を「異常な組合わせ」と考える。

(2)の箇所で説かれていることはこうである。「需要が強くて、最悪の条件下で生産される商品の個別的価値によって市場価格が規制されても需要が収縮しないような場合には、この商品が市場価格＝市場価値を規定する。そうしたことが生じうるのは、需要が普通の需要をこえる場合、または、供給が普通の供給量以下に減少する場合だけである。」

(4)の箇所ではこう説明される、「そして第1の背離は、商品量が過少な場合には最悪の条件下で生産される商品がつねに市場価値〔＝市場価格－引用者〕を規制するということであり、つまり、相異なる諸条件のもとで生産される諸分量間の単なる比率からすれば別の結果〔＝平均価値－引用者〕が生ずるはずにもかかわらず両極端の一方が市場価値を規定するということである」と。

優位の条件下で生産される商品が相対的大量という「第3の場合」について市場価値＝市場価格と需給関係に関する叙述をみよう。

（1）の個所では。市場価値に一致した市場価格と需給関係をみると、ただ需給の「異常な組合わせ」のもとでのみ、最良の条件下で生産される商品の個別価値が市場価値＝市場価格を規制する。

（2）の個所では。「生産される商品の分量が、中位の市場価値で売れる以上に大きい場合には、最良の条件下で生産される商品が市場価値〔＝市場価格〕を規制する。」（3）の個所では。「需要が供給に比べて弱ければ、有利に生産される部分が、大きさがどれだけであろうとも、その価格を個別的価値にまで収縮することによって、のさばってくる。市場価値〔＝平均価格〕は、供給が需要をはなはだしく超過する場合を除けば、最良の条件のもとで生産される商品の個別的価値とは一致しない。」（4）の個所では「そして第1の背離は、……商品量が過大な場合には最良の条件下で生産される商品がつねに市場価値〔＝市場価格〕を規制するということである。」

以上の叙述は、整理されたものとはいわれがたく、理解に苦しむ点もあるが、ともあれ、最良の条件下で生産される商品が相対的大量という「第3の場合」において、大量商品の個別的価値に規制される市場価値に、どのような需給関係によって市場価格が一致するかについて説かれてあることだけは確かである。そして、このような需給関係こそが需給の「異常な組合わせ」といわざるを得ないのである。

マルクスは、（4）の個所にすぐ続けて、つぎのように言う、「需要と生産物量との差がもっと大きければ、市場価格も市場価値から上か下かにいっそう大きく背離するであろう。ところで、生産される商品の量と、その商品が市場価値で売られるような量との差は、二つの原因から生じうる。一方の場合には、この商品量そのものが変動して過小または過大となる場合、つまり、与えられた市場価値を調整したとは別の規模で再生産が行われた場合。この場合には、需要は同一不変であるのに供給が変動したのであって、そのために相対的な過剰生産または過少生産が生じたのである。他方は、再生産すなわち供給は同一不変であるが需要が減少または増加した場合であって、この変動は種々の原因から生じうる。」つまり、需要と生産物量との差が一層大きければ、市場価格が市場価値から背離すると言っているのである。これは第2の背離であろう。

4. 結 語

マルクスが取り扱う市場価値は、市場価格と一致したものである。市場価値の決定と市場価格の決定とは違ったものである。市場価値は大量商品の個別的価値によって規制される。市場価格は需給関係によって決定される。市場価値に一致した市場価格を決定する需給関係の説明には、「不明瞭な箇所」における叙述がある。これらの点について、マルクスの叙述を整理したのが本稿である。

注

1) いち早く、山本二三丸氏は以下のように指摘された、「市場価値決定と市場価格決定との相違、したがってまた、

これら両者の決定に参与するそれぞれの諸要因は、厳密に識別され、明確に把握されるべきであって、軽々しく混同されるべきではない。」〔4〕128～9）と。

参考文献

- [1] マルクス『資本論草稿集』⑥『経済学批判（1861—1863年草稿）』第3分冊（大月書店、1981）本巻翻訳者：時永淑/安田展敏：本巻統一者時永淑。この[MEGA]第2部第3巻第3分冊は、1861—1863年草稿のノート第10冊（445ページ）から第13冊（752ページ）間で成る「剰余価値に関する諸学説」の第2の部分が収載されている。この訳書を使用し、引用箇所は手稿ページを本文中に示す。Karl Marx zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1864-1863) Text・Teil 3, Dietz Verlag Berlin, 1978.
- [2] 『資本論』第3巻第10章「競争。市場価格と市場価値。超過利潤」のなかの「市場価格と市場価値」においての考察である。Karl Marx, Das Kapital, Kritik der Politischen Ökonomie, Dritter Band, Buch III, Dietz Verlag Berlin 1964, SS. 182～209. 訳本は、長谷部文雄訳『資本論』第3部上冊（青木書店、1954年）と、岡崎次郎訳『資本論』第3巻第1分冊、『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻第1分冊（大月書店、1996年）とを利用した。この訳本からの引用はすべて第10章からであるから、引用頁は付さないことにした。
- [3] 大内力『地代と土地所有』（東京大学出版会、1958年）
- [4] 山本二三丸『価値論研究』（青木書店、1962年）
- [5] 本間要一郎/富塚良三編『資本論体系』第5巻「利潤・生産価格」（有斐閣、1994年）
- [6] 東井正美「市場価値論稿一『不明瞭な箇所』の再検討」、関西大学『経済論集』第44巻第5号、1995年1月。